

ソシュールは「ソシュールの法則」を発見したのか*

柳沢 民雄

Did de Saussure find ‘de Saussure’s law’?

Tamio YANAGISAWA

要旨：本稿は、リトアニア語のアクセント移動規則である、「ソシュールの法則」のプライオリティーについて論じている。ソシュールは1896年に論文「リトアニア語のアクセント法」の中でこの法則を発表した。それ以来この法則は「ソシュールの法則」と呼ばれている。しかしA. レスキーンは1880年代にライプツヒ大学の講義でこの法則を学生に教えていた。レスキーン門下の研究者らの著作にはこの法則を使ったものがあり、この法則のプライオリティーが問題になる。

キーワード：ソシュールの法則、リトアニア語、プライオリティー、de Saussure’s law, priority, Lithuanian, accentuation, A. Leskien, H. Hirt, W. Streitberg

1. はじめに

リトアニア語のアクセント移動法則として「ソシュールの法則 de Saussure’s law」というものがある。この法則についてソシュール F. de Saussure は1896年の *IF* 【*Indogermanische Forschungen* 『印欧語研究』】の論文「リトアニア語のアクセント法」の最初のページで次のように述べている（原文と翻訳をつける¹）：

A une certaine époque anté-dialectale (du reste indéterminée), l’accent «s’est régulièrement porté de 1 syllabe en avant² quand, reposant originairement sur une syllabe douce

¹ 本論の引用では内容が重要な場合のみ原文を引用する。そうでないと判断した場合は翻訳のみを引用する。【 】の中は柳沢の注である。本論の記号・略号の表記：A./Acc. = accusative, AP = Accent Paradigm, D. = dative, Du. = dual, G./Gen. = genitive, I./Instr. = instrumental, PIE = Proto-Indo-European, L./Loc. = locative, Lith. = Lithuanian, N./Nom. = nominative, Pl./Plur. = plural, Sg. = singular, Skt. = Sanskrit, Voc. = vocative. 1 = 1st person, 2 = 2nd person.

² このフランス語 ‘en avant’ 「前方に」とは、アクセント論では語末方向へのアクセント移動のことを言う。ソシュールの用いている用語の ‘douce’ とは ton montant 「上昇音調」を、‘rude’ とは ton descendant 「下降音調」を表す。それらを以下ではそれぞれ「circumflex 音調」、「acute 音調」と呼ぶことにする。標準リトアニア語では、circumflex 音調はゆっくりした上昇音調を、acute 音調は急激な下降音調を特徴とする。

(geschliffen), il avait immédiatement devant³ lui une syllable rude (gestossen)». — Ainsi **laĩkyti* (*aĩ + ý*) devenait *laikýti*, pendant que par ex. *ráižyti* (*ái + ý*) n'était pas amené à changer la place de l'accent. (*Recueil*, 526.)⁴

諸方言への分裂に先行するある時代に(その時代は不明である),アクセントは《最初,それが circumflex (geschliffen)音調を有する音節の上に落ち,その直後に acute (gestossen)音調が存在すれば,規則的に1音節だけ前方に【語末方向へ】移動した。》かくして,**laĩkyti* (*aĩ + ý*)は *laikýti* 《保つ,見なす》に変わった。それに対して,例えば,*ráižyti* (*ái + ý*)《切る》はアクセントの位置を変えなかった。

今,アクセント(stress)を ' によって, circumflex 音調を ~ によって, acute 音調を ´ によって表すならば,例えば, nom. sg. *rankà* 「手,腕」のアクセントは次のように移動したと仮定された:

rankà < **rañk'á* < **r'añká*

ソシュールは歴史以前には音調は各音節の上であり(上の例では2つの音節のそれぞれに音調がある),音調とは別にアクセントを仮定した。例から分かるように, circumflex 音調をもつ二重母音的結合 -*añ*- の上のアクセントは, 後続の acute 音調をもつ音節の -*á* に移行した。その後, 末尾位置でこの acute 音調の長母音が短縮し, 短いアクセント音節 -*à* になった。この語末での短縮は「レスキーンの法則 Leskien's law」と言われる。現代リトアニア語では, アクセント音節のみに音調を認めるので, 無アクセント音節の上に circumflex 音調はない⁵。また ` 記号は短音節のアクセントを示す(音調はない)。

ソシュールが引用する動詞の例を用いれば,

laik'ýti < **l'aĩk'ýti* (ソシュールの法則が働いた)

r'aižyti < **r'aižyti* (ソシュールの法則は働かない)

laik'ýti の場合, circumflex 音調(~)をもつ音節の上のアクセントは, 後続する acute 音調(´)をもつ音節の上に1音節だけ移動している。それに対して, *r'aižyti* の場合, acute 音調(´)をもつ音節の上のアクセントは後続の acute 音調(´)をもつ音節の上には移動しない。これがリトアニア語の「ソシュールの法則」と呼ばれているものである。

ソシュールはこの法則とおなじ主張をすでにその2年前の1894年9月8日の第10回国際オリエンタリスト会議でも発表している。これ以来, 上記のリトアニア語のアクセント移動

³ 'immédiatement devant' 「直前」とは, 上で述べたようにここでは「直後」ということである。ソシュールはアクセント位置を視点に語末方向へ向けて「前」と言っている。

⁴ *Recueil* = (1922) *Recueil des publications scientifiques de Ferdinand de Saussure*. Genève: Sonor.

⁵ ソシュールやその他の大部分のバルト・スラヴ語アクセント研究者は「ソシュールの法則」が働いた時代にはアクセントとは独立して, 音調は各音節にあったと考えている。それに対して, 現代標準リトアニア語では, 音調はアクセント音節にのみ音韻的に認められる。これをもって, 「ソシュールの法則」が働いたとされる歴史以前のリトアニア語においても, 音調はアクセント音節にのみ存在したのではないかと考える学者もいる(例えば, Kuryłowicz)。しかしこういった研究者の「ソシュールの法則」のアクセント移動の解釈は非常に複雑な様相をみせる。これについては柳沢(2017: 165f.)を参照。

の法則は「ソシュールの法則」と呼ばれてきた。これは現代のほとんどの文献において見いだすことができる。その法則のプライオリティーは当然にソシュールにあると思われるのである⁶。

言語学的な法則はそれを発見した研究者自らが「誰々の法則」と名付けることはしない。例えば、ゲルマン語のアクセント位置と子音の有声無声との関係を発見した Verner (1877)も、その発見者の名前を付けて、その現象を「ヴェルナーの法則 Verner's law」と呼ぶようになった。今我々が議論している「ソシュールの法則」もそのようにして名付けられたものである。

2. K. H. Meyer (1923)と W. Streitberg (1894)の発言

私は L. Sadnik (1959)の著『スラヴ語のアクセント法』(*Slavische Akzentuation I*)を読んでいるとき次の記述を見つけた。その中で Sadnik は、ソシュールがその法則を公表するはるか以前に、レスキーン A. Leskien によってその法則が知られていたと書いている：

Das sog. „Gesetz von de Saussure“ wurde unabhängig auch von F. Fortunatov entdeckt (in *SbORJSI* 64, 1897, S. 62), der seine Gültigkeit sofort auf das Slavische ausdehnte; nach K. H. Meyer (*Historische Grammatik der russischen Sprache*, Bonn 1923, S. 205) soll das Gesetz schon A. Leskien in den 80er Jahren des 19. Jh.s ständig gelehrt haben.

この所謂《ソシュールの法則 Gesetz von de Saussure》⁷は、また F. Fortunatov によっても独立に発見された (*SbORJSI* 64, 1897, S. 62)。彼はこの有効性をすぐにスラヴ語に広げた。K. H. Meyer (『ロシア語歴史文法』, Bonn 1923, S. 205) によれば、この法則を A. Leskien はすでに 19 世紀の 80 年代に絶えず教えていたという。(*ibid.* 23)⁸

これは私にとって驚きであった。というのも私は当然に「ソシュールの法則」はソシュールにプライオリティー (authorial priority) があると思っていたのであるから⁹。早速、マイアー K. H. Meyer (1923)の『ロシア語歴史文法』(*Historische Grammatik der russischen Sprache*)を調べて見ると、マイアーは「ソシュールの法則」(SG = de Saussuresches Gesetz)の注として、次のように書いている：

Benannt nach de Saussure, der in den *IF* VI (1896) Anzeiger, S. 157 das Gesetz in klarer

⁶ 例えば、Joseph (2009: 191)を見よ: ‘At long last, he had a linguistic law to his credit.’

⁷ Sadnik は Das sog. „Gesetz von de Saussure”と書いている。この sog. 「所謂」とは本論の議論をすべて言い尽くしていると思う。

⁸ ここに書いてあるようにロシアの学者フォルトゥナートフ F. F. Fortunatov (1848-1914)も独自に「ソシュールの法則」を発見した。その後、この法則はリトアニア語だけでなくスラヴ語にも働いたと仮定され、スラヴ圏では「フォルトゥナートフ・ソシュールの法則 закон Фортунатова-де Соссюра」と呼ばれることとなった。上記のフォルトゥナートフの論文はソシュールの論文より1年後に出ている。

⁹ 柳沢「リトアニア語のアクセント研究」2017: 143 参照。

Form veröffentlichte. In seinen Kollegs hatte es A. Leskien bereits in den 80er Jahren des 19. Jahrh. ständig gelehrt (nach Herrn Prof. W. Streitbergs mündlicher Mitteilung), so daß W. Streitberg IF III (1894, geschrieben 1892), S. 156 das Gesetz als bekannt voraussetzt.

【ソシュールの法則は】de Saussure にちなんで命名された。彼は IF VI (1896) Anzeiger, S. 157 でこの法則をより明白な形で公表した。レスキーン A. Leskien は自分の講義の中ですでに 19 世紀 80 年代にひっきりなしにそれを教えていた (Prof. W. Streitberg 氏による口頭での情報)。その結果、シュトライトベルク W. Streitberg IF III (1894, 1892 年に書かれた), S. 156 は、周知のものとしてこの法則を前提としている。(ibid. 205, n. 1)

上で述べたようにソシュールが初めてその法則を公の場で述べたのは、1894 年 9 月 8 日の第 10 回国際オリエンタリスト会議であるので¹⁰、ソシュールが公にした時期より 2 年ほど前にシュトライトベルクはその法則を使って論文を書いたことになる。シュトライトベルク(1864-1925)はライプツィヒ大学でレスキーン(1840-1916)の授業を受けたと思われる。ソシュール(1857-1913)もまた同大学でレスキーンのリトアニア語の授業を受けている。上のシュトライトベルクの IF (1894 III: 148-156)の論文は、「バルト語における同音節的な -ns の前の母音延長 Vokaldehnung vor tautosyllabischem -ns im Baltischen」であり、p. 156 にはつぎのような記述によって論文を終えている：

... Das lit. *ė* erklärt sich jedoch sofort, wenn man Entlehnung aus russisch *mjás*o annimmt; denn russ. *ja* erscheint im Litauischen als *ė*. Der Unterschied in der Akzentstelle spricht nicht dagegen; denn bei den Femininen muss die Endung betont werden, wenn die Wurzelsilbe geschleift ist. Ein **mėsa* wird also *mė̀sà*. (Oktober 1892. Wilhelm Streitberg)

しかしリトアニア語の *ė* は、ロシア語 *mjás*o【мясо 肉】からの借用語を仮定するならばすぐに説明が付く。というのはロシア語の *ja*【я】は、リトアニア語では *ė* として現れるからである。アクセント位置の相違について異論はない。というのは女性名詞の場合、語根音節が circumflex 音調であるとき語尾にはアクセントが置かれねばならない。つまり **mėsa* は *mė̀sà* になる。(1892 年 10 月. Wilhelm Streitberg)

上のように、シュトライトベルクは、論文の最後に 1892 年の日付を入れている (ソシュールの 1894 年の発表より前)。さて、マイヤーが言う、シュトライトベルクが「ソシュールの法則」を周知のものとして前提にする箇所は、論文の末尾の *mėsa* > *mė̀sà* である。これを我々の表記を用いれば次のように表すことができよう：**m'ė̀sá* > **mė̀s'á* > *mė̀sà* (AP 4)¹¹。

¹⁰ 後述するように、ソシュールは「1889 年 6 月 8 日の【パリ言語学会の】会議」で後のリトアニア語のアクセントに関する研究を発表したと言っている。この発表内容は Saussure (1894a)に発表したものと同じであろう。

¹¹ AP 4 は現代リトアニア語の名詞のアクセント・パラダイム (Accent Paradigm = AP)の第 4

シュトライトベルクはこれをロシア語からの借用語であると仮定することにより、この語根に circumflex 音調を仮定し、そして「ソシュールの法則」を使って語根音節(˘)から語尾音節 (acute 音調(´), 後にレスキーンの法則によって短縮(˘))へのアクセントの移動性を説明している。シュトライトベルクのこの説が正しいか正しくないかは別にして、彼は「ソシュールの法則」を正しく理解していたことは確かである。

3. 「ソシュールの法則」はソシュールの発表前に知られていたのか

いままでの議論からマイヤーの「A.レスキーンは彼の講義の中ですでに 19 世紀 80 年代にひっきりなしにそれ【「ソシュールの法則」】を教えていた(シュトライトベルク教授による口頭での情報)」、という発言は正しいことが裏付けられた。レスキーンはライプツィヒ大学でスラヴ語やリトアニア語を教えていた。神山(2017: 26ff.)によれば、ソシュールがライプツィヒ大学に入学(1876 年 10 月)以後のレスキーンのリトアニア語の授業(「リトアニア語文法 Grammatik der litauischen Sprache」)は、1878 年夏学期(4 月 25 日から 8 月 17 日間の月火木金の 12 時から 13 時)に行われている。およそ 4 ヶ月間、週 4 回というかなりの集中授業である。ソシュールはこの授業に出席した。シュトライトベルクはソシュールより 7 歳年少であるから、シュトライトベルクのリトアニア語授業への出席は 80 年代のことになる(マイヤーの証言と一致する)。ソシュールは 1877 年秋ごろから彼の最初の著作である『覚え書』 *Mémoire* の執筆を開始した(出版は 1879 年 12 月)。その後、ベルリン大学にて勉学し、1879 年に再びライプツィヒ大学に戻っている。1880 年 2 月に「サンスクリットの絶対属格の用法」で博士論文を提出、同年 8 月に 2 週間ほど東プロシアでリトアニア語のフィールド調査を行っている。同年 11 月パリ留学。以後ソシュールはパリ、そしてジュネーブで生活し、ライプツィヒには戻ることはなかった。

シュトライトベルクによれば、レスキーンは 80 年代に「ソシュールの法則」をひっきりなしに教えていたという。ソシュールが出席した 1878 年の授業のときには「ソシュールの法則」をレスキーンは教えたのであろうか。もしその当時レスキーンがまだその法則に気付かなかったとしても(つまり教えることがなかったとしても)、ソシュールの 80 年代から 1896 年までの研究の中心はリトアニア語のアクセント法の研究であったのであるから(ソシュールは彼の 30 代をこの研究に捧げている)、ソシュールがこのレスキーンによる「ソシュールの法則」を知らないはずはないと思える。神山(*ibid.* 242)によれば、ソシュ

型を意味する。名詞には 1 から 4 までの AP の型があるが、AP 4 は移動アクセントタイプの語根が circumflex 音調(あるいは短アクセント(*grave*))の語を意味する。

この語の語源解釈については、Derksen (2015: 312f.)が 19 世紀の仮説について簡単に纏めている。それによれば、「19 世紀末以来、他のバルト語の形と違って、リトアニア語の *mèsà* は東スラヴ語からの借用語であるという仮説(例えば、Mikkola 1897)は、その語は本来的に【印欧語から】相続された語であるという仮説と競争していた。後者の場合、*mès-* は **mēms-* を引き継いでいると一般にみなされる。鼻音の消失はしばしば印欧祖語の時代まで遡る、cf. Skt. *mās-* (e.g. Schmidt 1883: 340)。古典理論において延長階梯母音は規則的に acute 音調であるので、*mèsà* のアクセント法は問題を引き起こす。実際、語根が circumflex 音調であるとする主張は、借用仮説の主張が有利であると見なされよう。」

ルにとってドイツの学者の中で親交があったのはただシュトライトベルク一人だけという。彼はソシュールの追悼文(1915)も書いている。シュトライトベルクとソシュールの交流を勘案すれば、ソシュールがレスキーンによる「ソシュールの法則」を知らなかったと考えることには無理がある。

4. 1895年のHirtの「ソシュールの法則」についての記述

今までの議論から「ソシュールの法則」はレスキーンによって知られており、ライプツィヒ大学でのレスキーンの授業で何度も述べられていた。これはリトアニア語のアクセントに興味を持つ学生達にも知られた「法則」であったはずである。ヒルト H. Hirt (1865-1936)もまたそういった研究者の一人であり、彼はライプツィヒ大学でレスキーンらの青年文法学派の人達に学び、印欧語の母音交替とアクセントに関心をもっていた¹²。年齢はシュトライトベルクより1歳若い。ヒルトは1895年に『印欧語のアクセント』(Der indogermanische Akzent)を出版する。ヒルト (Hirt 1895: 95)はアクセントが移動する規則を幾つか挙げている中で、「ソシュールの法則」を次のように説明している：

3. War die Wurzelsilbe bei Schleifton betont, so ziehen die stossend betonten einsilbigen Endungen den Akzent auf sich. Es heisst also von *būtas* Sg. Voc. *butè*, Instr. *butù*, Lok. *butè*, Plur. Acc. *butùs*, N. Du. *butù*; von *žōdis*, Instr. *žodžiù*, Pl. Acc. *žodžiùs*, Du. N. *žodžiù*; Gen. *rañkos*, aber N. V. I. *rankà*, Acc. Pl. *rankàs*; von *szveñtè*, Instr. *szventè*, Acc. Pl. *szventès*, N. Du. *szventì*; von *smeřtis*, Instr. *smercziù*, Plur. Acc. *smercziùs*; 1. 2. Sg. *sukù*, *sukì*.

3. circumflex 音調(Schleifton)をもつ語根音節にアクセントがあったならば、突き(stossend)アクセント【= acute 音調】の単音節語尾はそのアクセントをそれ自身の上に引きつける。すなわち、*būtas*¹³【住宅 AP 2】から Sg. Voc. *butè*, Instr. *butù*, Loc. *butè*, Plur. Acc. *butùs*, N. Du. *butù* と言われ、*žōdis*【語 AP 2】から Instr. *žodžiù*, Pl. Acc. *žodžùs*, Du. N. *žodžiù* と言われ、Gen. *rañkos*、しかし N. V. I. *rankà*【手、腕 AP 2】、Acc. Pl. *rankàs*; *szveñtè*【祭日 AP 2】から Instr. *szventè*, Acc. Pl. *szventès*, N. Du. *szventì*, N. Du. *szventì* と言われ、*smeřtis*【死 AP 2/4】から Instr. *smercziù*, Plur. Acc. *smercziùs*; 1. 2. Sg. *sukù*, *sukì*【回す】と言われる。

ヒルトが挙げている例はいずれも「ソシュールの法則」が働いている形である(名詞は

¹² 一例を挙げれば、彼は「ヒルトの法則 Hirt's law」を発見した。これは他の印欧語の oxytone をもつ一部の語が、バルト・スラヴ語で barytone アクセントパラダイムをもつという法則である。Hirt (1929: 165ff.)参照。

¹³ 翻訳では名詞にそれが属するアクセントパラダイム(AP)の番号を付けた(本論5節を参照)。AP 2とAP 4は「ソシュールの法則」が働くアクセントパラダイムである。*būtas*の語根は現代リトアニア語では短アクセント：*būtas* AP 2。いずれにせよここでの議論に影響はない。「ソシュールの法則」は、circumflex 音調あるいは短アクセントから後続する acute 音調音節へと1音節移動するからである。

AP2 あるいは AP4 の型に属する語形であり、動詞は語根が短アクセント (grave) をもつ例である: inf. *sùkti*)¹⁴。この記述はヒルトが「ソシュールの法則」を正しく理解していることを示している。この本の序文にはヒルト自身による 1895 年 3 月 25 日の日付が記されている (Hirt 1895: XIII)。ソシュールの 1894 年 9 月 8 日の第 10 回国際オリエンタリスト会議での「ソシュールの法則」の発表よりおよそ半年後にヒルトの本は書き終わられた。ヒルトがソシュールの 1894 年 9 月 8 日の発表をヒルトの本の出版前に知っていたかは分からないが(ソシュールの第 10 回国際オリエンタリスト会議での発表が Congrès international des Orientalistes に掲載されたのは 1897 年である)、上でシュトライトベルクがすでにレスキーンからこの法則を知らされていたことを考えると、ヒルトも当然レスキーンからこの法則を知らされていたと思える(実際、ヒルトはレスキーンからこの法則を教えられていた。6 節参照)。ヒルトの本にはレスキーンの名前は出てこないが、これは当時すでにレスキーン門下の人達には知られた法則であったためではないかと思われる。「レスキーンは彼の講義の中ですでに 19 世紀 80 年代にひっきりなしにそれを教えていた」という状況を考えれば、ヒルトはこの法則のプライオリティーが誰にあるかを言うことは無益に思えたのであろう。

今までの議論から「ソシュールの法則」が当時どのようにレスキーン門下の研究者たちに受け取られていたかが分かるだろう。そういった状況であったのにも拘わらず、何故後にこの法則は「ソシュールの法則」と名付けられたのであろうか。この法則はレスキーンによって知られていたとすれば、「レスキーン第 2 法則」とでも名付けるべきではなかろうか¹⁵。実はある法則の発見あるいは発明のプライオリティーを巡っては、常に問題が生じることを歴史は我々に教えている。このリトアニア語のアクセントの法則に「ソシュールの法則」という名が付けられたのは、恐らくソシュールが 1896 年に発表した論文「リトアニア語のアクセント法 Accentuation lituanienne」のためであろう。上で述べたように、この論文には最初のページに「ソシュールの法則」が載せられている。しかしこの論文の趣旨は「ソシュールの法則」の発見、説明ではないのである¹⁶。ソシュールはリトアニア語に「ソシュールの法則」を適用することにより、リトアニア語のアクセントパラダイムから

¹⁴ 動詞の単数 1, 2 人称形に「ソシュールの法則」が働くのは、語尾に acute 音調が仮定されるからである: sg. 1. **s'ùkúo* > **sùk'úo* > *sukù*, sg. 2. **s'ùkie* > **sùk'ie* > *sukì*.

¹⁵ Leskien (1881: 188-190) の論文によって、リトアニア語において今知られている語末の acute 音調が短縮するという「レスキーン第 2 法則」とは別の法則として。

¹⁶ この論文の趣旨を勘違いする人は多い。例えば、三省堂言語学大事典(「ソシュール」の項目)によれば、「後者【論文「リトアニア語のアクセント法」】は「ソシュールの法則」と呼ばれる現象の説明である。」(第 6 巻, 術後編 p.1469) これはこのソシュール論文の主旨を完全に間違えている。この論文の主旨は「ソシュールの法則」と呼ばれる現象の「説明」ではない。ソシュールはこの論文の注の中で、この法則を 3 モーラ音節の主音が 1 モーラだけ移動すると解釈し、極めて単純なので説明する必要もないとする。彼は「何故、まさに 4 番目の場合、それだけがアクセントの今批評している位置をつくるかを理解するためには、この表を一瞥すれば十分である。」(Recueil, 526, note 2) と書いている。この論文の価値については柳沢(2017:173-196)を参照。

その「ソシュールの法則」という音法則によって生じた2次的なアクセントの移動を取り除く。その結果、「ソシュールの法則」が働く以前のリトアニア語の古い層（歴史以前のリトアニア語）の中に、古代の印欧諸語（サンスクリットや古代ギリシア語）のアクセント法と類似した2つのアクセントパラダイム（固定と移動のアクセントパラダイム）を発見している。そして古代印欧諸語とリトアニア語のアクセント法が関連しているとみなし、リトアニア語における移動アクセント（これは語頭音節と語末音節との間を移動するという性質をもつ）の起源について仮説を提示している。ソシュールのこの論文はリトアニア語アクセントについてそれまで書かれたものの中で最も優れたものであるだけでなく、その後のバルト語（またスラヴ語）アクセント論を基礎付けたものであり、多くの点で時代を超えたものである。従って、「ソシュールの法則」のプライオリティーとは別に、この法則を明確に定義したことから後に研究者達が「ソシュールの法則」と呼ぶことになったのであろう。

レスキーンはソシュール死後（1913）の1919年に、ヒルトとシュトライトベルク編の印欧語叢書の1冊として『リトアニア語教本 文法と語彙集つき *Litauisches Lesebuch mit Grammatik und Wörterbuch*』を出版している。「ソシュールの法則」に触れている箇所は以下のようなものである：

Wenn auf eine Silbe steigender Intonation (geschleiften Tones) eine Silbe fallender Intonation (gestoßenen Tones) folgt, so zieht die letztere den Hauptton auf sich. (*ibid.* 154)
 上昇音調(geschleiften Tones)【circumflex 音調】の音節に下降音調(gestoßenen Tones)【acute 音調】が続くとき、後者の音節は主強勢を自己の上に引っ張る。

教本のせいもあるかもしれないが、この箇所にはソシュールの論文について何も触れられていない。しかし「レスキーンの法則」について書いてある箇所 (*ibid.* 137f.)では、彼の1881年の論文「Die Quantitätsverhältnisse im Auslaut des Litauischen. Arch. für slav. Phil. V, 188」が参考文献として載せてある。レスキーンは当然、Saussure (1896)を読んでいると思われるが、ソシュールのこの論文には触れない。これは前にも述べたように、レスキーンがこの法則に対するプライオリティーがソシュールにはないと考えていたとすれば、当然だろう。

5. ソシュールのプライオリティーの主張

さて、今まで我々は「ソシュールの法則」は1880年代にレスキーンによって知られており、レスキーン門下のシュトライトベルクやヒルトらによってその知識は共有された、一方、ソシュールは恐らくそのことを知っていた可能性があるとして議論してきた。ところがSaussure (1896)は、論文「リトアニア語のアクセント法」(Accentuation lituanienne) (*IF*, IV, Anzeiger, pp. 157-166 [*Recueil*, 527-538]) の最後に、P. S. (追伸)としてその法則のプライオリティーはソシュール自身にあると書いている：

私がこれらの文を書いていたとき、最近出版されたヒルトの『印欧語のアクセント』(M. H. Hirt, *Der indogermanische Akzent*) の本についてまだ知らなかった。それは著者の最も良い意味でリトアニア語アクセントを理解させようとする真面目な試みにも拘わらず、私に多くの反論を余儀なくさせるものである。

ヒルトは、circumflex 音調グループ + acute 音調グループによるアクセントの全般的な移動、つまり現代のリトアニア語の全ての状態の基礎を何も考えていない。

しかしながら、彼はその語形変化の分析にさいして、「acute 音調の語尾がそこに circumflex 音調の語根のアクセントを引き寄せた」(p. 95)と見なすようにしむけられている。その事実は、この形のなかにあっても、その法則の真の考えを与えないとしても、少なくとも語形変化の全体を明らかにすることはできたであろう。しかしヒルトはこの事実を以下のように一連の証明できない法則と一緒にしている (p. 93-95)。その結果、それは語形変化の分野においてさえ取るに足りない理解にしか持ち得ないことになっている。

我々が述べていることは、観点の違いを強調することを目的にしている。プライオリティーを要求することではない、それはいずれにせよ必要ないことである。というのも我々がそれを理解しているものとしてのその法則は、【私によって】早くも 1894 年にジュネーブのオリエンタリスト会議で発表されたのであり、誰も会議の会報 (Bulletin du Congrès)¹⁷ のなかにもその公式をこのとき以来読むことができるからである。(私はその法則をより以前にすでに指摘した：M. S. L. VIII 445 [p. 511]¹⁷; I. F. IV 460, note 3 [p. 517, note 1].)

もし人がヒルトと我々のものとを比較すれば、その外的な類似があるにも拘わらず、oxytones について、また oxytones とリトアニア語パラダイムとの結びつきについて及ぶと、彼の理論はさらにいっそう我々とは違っているのである。

原注 1 . [Bulletin N^o 5. *Actes du X^e Congrès international des Orientalistes*, tome I, p. 89.]

ソシュールがこのようにヒルトを批判するのは、Hirt (1895)の理解は単なるアクセント移動の条件を示しただけであって、この法則がリトアニア語の言語体系のなかで如何に働いているか、あるいは歴史的に如何にアクセントパラダイムの体系が変化したか(例えば、名詞の 4 つのアクセントパラダイムを 2 つに還元できること)、等を考えていないからである。しかし我々が今議論しているこの法則のプライオリティーとなるとどうであろうか。ソシュールは 1894 年の第 10 回国際オリエンタリスト会議での発表をプライオリティーが自分にある証拠とする。その会議の会報は以下のように *Recueil*, 603f.に再掲されている：

1894 年の 9 月 8 日土曜日の会議。— ソシュール氏はリトアニア語のアクセント法

¹⁷ []のなかには『F. de ソシュールの学術論文集』(*Recueil des publications scientifiques de Ferdinand de Saussure*. Genève, 1922)の編注である。

について発表した。アクセントの場所は、アクセントが circumflex 音調（クルシャト Kurschat によれば geschliffen とされる）の上にあつて、その音節それ自身が acute 音調（gestossen）によって後続されたときには、常に 1 音節だけ位置を変えた。そしてこの場合にアクセントは acute 音節に移動した。この法則を次のように述べることができる：《アクセントのある circumflex + 無アクセントの acute は、無アクセントの circumflex + アクセントのある acute を引き起こす。》これはそれまで奇想天外なように見えていた曲用や活用の全ての組織を突然に単純なものにする。ソシュール氏は žolě の曲用を取り上げ、4 つのアクセントパラダイムを総括して、そのすべての形態を 2 つのパラダイム、つまり一つは移動パラダイム、他方は固定パラダイムに還元する。

この会報を書いた人は恐らくソシュール自身であろう¹⁸。ソシュールは žolě 「草」という語を取り上げ、「ソシュールの法則」を説明したようだ。この語は AP4 タイプの語なので、恐らくソシュールはリトアニア語の -ė で終わる女性名詞の他のアクセントパラダイムの語も使って、以下のように 4 つのアクセントパラダイムを示したのである（このタイプの曲用はソシュールの法則を最も分かりやすく示している）：

	AP 1	AP 2	AP 3	AP 4
Sg.	鶴	蜜蜂	広場	草
N.	gėrvė	bītė	aikštė	žolė
G.	gėrvės	bītės	aikštės	žolės
D.	gėrvei	bītei	áikštei	žolėi
A.	gėrvę	bītę	áikštę	žolę
I.	gėrve	<u>bītė</u>	áikšte	<u>žolė</u>
L.	gėrvėje	bītėje	aikštėje	žolėje
Pl.				
N.	gėrvės	bītės	áikštės	žolės
G.	gėrvių	bičių	aikščių	žolių
D.	gėrvėms	bītėms	aikštėms	žolėms
A.	gėrves	<u>bītės</u>	áikštes	<u>žolės</u>
I.	gėrvėmis	bītėmis	aikštėmis	žolėmis
L.	gėrvėse	bītėse	aikštėse	žolėse

下線部は「ソシュールの法則」が働いた箇所であり、AP 1 に対して AP 2 は下線部の形だ

¹⁸ 何故なら、これはソシュールの論文集(*Recueil*)に入れられているからである。また、以下も参照：「この年、ジュネーヴで第 10 回国際オリエンタリスト会議が開催され、ソシュールは同僚・友人のポール・オルトラマールとともにその大会事務局を担当した。(神山 2017:74)

けアクセントが1音節だけ前進している¹⁹。他方, AP3 に対して AP4 は下線部の形だけアクセントが1音節だけ前進している。AP2 と AP4 はいずれも語根音節は circumflex 音調あるいは短アクセント(grave)である。下線部の語尾はいずれも短アクセントになっているのは, レスキーンの法則が働いた結果であり, 本来は acute 音調であった。従って, 下線部において語根にあったアクセントは1音節だけ移動した。その後に語末の acute 音調は短縮した。ソシュールはこれから, 「ソシュールの法則」が働く以前にはアクセントパラダイムは2つに還元できることを示したであろう。つまり AP1 型と AP3 型であり, それぞれは語根固定アクセント型と, 語根と語末の間をアクセントが移動する移動アクセント型である。これが上の会報にある次の言葉である: 「これはそれまで奇想天外のように見えていた曲用や活用の全ての組織を突然に単純なものにする。ソシュール氏は žolė の曲用を取り上げ, 4つのアクセントパラダイムを総括して, そのすべての形態を2つのパラダイム, つまり一つは移動パラダイム, 他方は固定パラダイムに還元する。」

上で触れたように, ソシュールはこの会議での発表以前に「私はその法則をより以前にすでに指摘した: *M. S. L.* VIII 445 [p. 511], *I. F.* IV 460, note 3 [p. 517, note 1]」と追伸で書いている。*M. S. L.* VIII 445 とは, 1894年に *Mémoires de la Société de Linguistique* (『パリ言語学会紀要』) に発表された論文「リトアニア語のアクセント法について」(*À propos de l'accentuation lituanienne*) のことである。この論文の最初に次のように書かれている:

以下で述べられているものは, 私が4年前にパリ言語学会で行った報告の内容である。リトアニア語の音調と音調アクセントを扱う専門研究において同じ考えを発展させる予定であったので, 私は我々の *MSL* にその報告を発表しなかった。しかしこの間に現れ, はじめ私が気付かずにいた M. Bezzenger の小論文が, 私の基本的原理が他のところで完全な姿で発表されるまえに, 私にいくつかの基本的な考えを再び述べる気を起こさせたのである。(Recueil, 490)

4年前の発表とは, ソシュールの注によれば, 「1889年6月8日の会議」である(Recueil, 490, note 1)。この「リトアニア語のアクセント法について」の論文(Saussure 1894a)は, 1896年の「リトアニア語のアクセント法 Accentuation lituanienne」(*IF* VI. Anzeiger)の前の論文である。ソシュールはリトアニア語のアクセントについて2つの論文を書いているが, 1894a年の論文の最後のページに *A suivre* (続く)と書かれていることから, 2つの論文は一続きのものに見なしてよいだろう²⁰。この Saussure (1894a)論文は「ソシュールの法則」について述べたものではなく, Fortunatov (1880)の発見をうけて, 古代印欧諸語の母音の量とリトアニア語の音調との関係を究明したものである。すなわち, 古代印欧語の長い単母音(また長いソナント)はリトアニア語では acute 音調に対応し, 古代印欧語の短い単母

¹⁹ 「前進する」とは, 語末方向へアクセントが移動することである。脚注2参照。

²⁰ *Recueil* の編者(Charles Bally, Léopold Gautier)はこの '*A suivre*' の後に [*La suite annoncée n'a jamais paru.*] (告げられた続きは決して出なかった) (*Recueil*, 512)と書いているが。

音（また二重母音と短いソナント）はリトアニア語では circumflex 音調に対応するというものである。ところでこの論文の中に「ソシュールの法則」をすでに指摘した、とソシュールが言うのは次のことを指している。ソシュールは印欧祖語の二重母音（また二重母音的結合）はリトアニア語において circumflex 音調に対応するとして、多くの例を挙げる (*Recueil*, 507f.)。例えば、

PIE **ont(e)ros-* «autre»: — Lith. *añtras*.

PIE **dont-* «dent»: — Lith. *dantìs*, Acc. *dañtj*.

ソシュールはまたこれに興味深い例を付け加えている。circumflex 音調をもつ現在分詞の -ant- 音節である。ソシュールは、主格 (*neþąs*)においてこの音節は末尾であるために普通の条件では現れることはなく、また残りのパラダイムではそれは決してアクセント下では出会うから (*nėþantj*)、これを直接確かめることはできないとする。そしてソシュールはこの -ant- 音節が circumflex 音調であるとみなす根拠を次のように書いている：

しかし以下で詳説される法則 (*Accentuation*) から以下のことを引き出すことができる：アクセントは、もし *nė-* に後続する音節が acute 音調であったならば、*nė-* の上には落ちなかったであろう。 (*Recueil*, 511)

この論文には「法則 (*Accentuation*)」の説明はない。この「法則」とは勿論「ソシュールの法則」のことを指していることは間違いない。この例でソシュールが言いたいことは、もし -ant- 音節が acute 音調をもっていたならば、アクセントはこの音節に移動したはずであるが、そうになっていないのであるからこの音節は circumflex 音調であったということである。ソシュールは、この 1894 年の論文のなかで「ソシュールの法則」に確かに触れている。

さらにソシュールが「ソシュールの法則」をすでに 1894 年に発表していた証拠として示すのは、論文「リトアニア語における子音曲用の複数主格と単数属格について」 (*Sur le nominatif pluriel et le génitif singulier de la déclinaison consonantique en lituanien*) (*IF* IV, 1894b: 456-470) にある注である：*I. F.* IV 460, note 3 [*Recueil*, 517, note 1]。この論文はリトアニア語の Nom. Pl. *ākmens, mótērs*, Gen. Sg. *akmeñs, motėrš* のような語尾の語中音省略について論じている。ソシュールはその注で *i* の語中音省略との関連でこの法則を証拠とする：「しかしながら *mán, táv, sáv* にとって、非常に決定的な証拠は我々が他に述べているアクセントの一般的事実の結果であろう。」²¹

²¹ ソシュールの論証はわかりにくいだが、ここで次のように「ソシュールの法則」を利用していただろう。「与格をもつ gérondif の *sekanti-sėkant, sekusi-sėkus* 【< *sėkti* 「見守る」。両形はヴァリエーション】、同様に人称代名詞与格形【それぞれ 1 sg., 2 sg., 再帰】 *mani-mán, tavi-táv, savi-sáv* において、*i* はそれ自身で全ての末尾の *i* と同様に、原初的な *-ĩ* か、原初的な *-ė, -ī* あるいは *-in* (それらは Leskien の法則によって短縮された) を表している」 (*Recueil*, 516)。「我々は *mán, táv, sáv* を *sėkant* と同じ与格を含むものとして見なす。」 (*ibid.* 517, not 1.) この *sėkant* のアクセントはソシュールの法則を受けていない。従って *mán, táv, sáv* も原初的ではなくて、

ソシュールがその法則のプライオリティーを主張する証拠はいずれも 1894 年の論文にあるということが分かる。彼はそれを強調するのであるが、果たしてプライオリティーの証拠になるのであろうか。

6. Hirt (1929)によるソシュール批判

ヒルトは 1929 年に『印欧語文法』(*Indogermanische Grammatik*)の 5 巻目として『アクセント』(*Der Akzent*)を出版する。彼はそこでソシュールのアクセント論批判を行っており、上でのべた「ソシュールの法則」のプライオリティーについても書いている。まず、「印欧語と比較したリトアニア語・スラヴ語のアクセント」の章で彼はこう書いている：

私は最初から私の『印欧語アクセント』(*Indogermanische Akzent*)【1895】のなかでこれらの法則を得ようと努力してきた。しかしそのすぐ後にソシュールの論文 *JF. Anz.* 6, 157, Rec. 526 【*Accentuation lituanienne*, 1896】が現れた。その論文は問題全体を見かけ上とても簡単に解いたので、私の詳論は全くそれに対して勢いが衰えてしまった。ついに今日、ソシュールの見解はその研究分野を支配している。しかし新たな検査に従って私はただ私の見解に固執し、ソシュール理論を見かけ倒し[はったり] (*Blender*)であると言明しなければならない。(中略)

ソシュールは次のように主張した：リトアニア語においてアクセントは *Schleifton* 【*circumflex* 音調】をもつある音節から *Stoßton* 【*acute* 音調】をもつ次の音節へ移動したと、つまり、 $\overset{\circ}{\text{a}}\overset{\circ}{\text{b}}\overset{\circ}{\text{c}}$ から $\overset{\circ}{\text{a}}\overset{\circ}{\text{b}}\overset{\circ}{\text{c}}$ が生じたと、つまり謂わば、全く最小の動きが重要なのである。この見かけ上の単純さは呆れさせる。同様に、呆れさせるのは、ソシュールが $\overset{\circ}{\text{r}}, \overset{\circ}{\text{l}}, \overset{\circ}{\text{m}}, \overset{\circ}{\text{n}}$ のためにリトアニア語の音調から推察する証明であるが、それにも拘わらずそれは間違っている。(中略)しかし、ソシュールの音調移動の仮定は、彼が、語尾の《*Stoßton*》がそれ自身の上に音調を引っ張った、と仮定すると言う点にのみ正しい。しかしこの考えは彼によって見つけ出されたのではない (*Diese Ansicht ist aber nicht von ihm gefunden.*)。 (Hirt 1929: 163f.) 【下線部は柳沢による】

ヒルトのソシュールに対する批判の口調はかなり激しい。ソシュールのアクセント理論を‘*Blender*’と言っており、独和辞書によればこの語は《軽蔑語》で「山師、ほら吹き」の意味をもつ。ヒルトは、我々が「ソシュールの法則」と呼ぶ法則について、「この考えは彼によって見つけ出されたのではない」と言う。これは上でのマイヤーやシュトライトベルクの発言と一致する。これについてヒルトはさらに同じ本の別な箇所（ヒルトの言う第 2 法則）でこの法則のプライオリティーについて次のように書いている：

ソシュールの法則が働いたときには *acute* 音調ではなかった：*māni, tāvi, sāvi* あるいは *māni, tāvi, savi*. Cf. 「今日至る所で使われている短縮されたヴァリエント *mán, táu, sáu* は 2 次的起源の *acute* を持っている。」 (Zinkevičius 1981: 48)

次末音節がリトアニア語とスラヴ語において短アクセントあるいは circumflex アクセントならば, acute アクセントの単音節語尾は自身の上にアクセントを引き寄せる。-ā で終わる女性名詞の Kurschat²²のパラダイム Ib【 = AP 2】を比較せよ :

Sg. N. <i>rankà</i>	Pl. N. <i>rañkōs</i>
G. <i>rañkōs</i>	G. <i>rañkū</i>
D. <i>rañkai</i>	D. <i>rañkoms</i>

【中略】

我々は通して語頭アクセントをもつパラダイムをここにもっている。ここでは acute 語尾音節をもつ格だけアクセントはこの上に引っ張られる。この法則は様々な研究者達によって発見された, 上述の p. 145 を参照。

[Dieses Gesetz ist von verschiedenen Forschern gefunden worden, vgl. oben S. 145.]
(*ibid.* 170f.) 【下線部は柳沢による】

ヒルトが参照として挙げる, p. 145 の注にはこの法則のことが次のように書かれている :

この法則はソシュールによって立てられたものとは本質的に別のものである。それ【ソシュールによって立てられたもの】によれば, circumflex (Zirkumflex) アクセントをもついずれの音節もそのアクセントを acute (Akut) をもつ次の音節に手渡す。そのためにそれはまた不当なものである。それは K. H. Meyer, Russ, Gr. 205 やその他がするように, ソシュールの法則と呼ぶべきである。誰がそれを最初に見つけたかは, 恐らく突きとめることはできないだろう。私は当時それを *Leskien* から知るようになった。しかし彼の正しさは最初は異議を唱えられた。(Idg. Akzent 97, 1895)

[Wer es zuerst gefunden hat, wird sich wohl nicht ermitteln lassen. Ich habe es seinerzeit von *Leskien* kennen gelernt, seine Richtigkeit aber zunächst bestritten (Idg. Akzent 97 vom Jahr 1895)]. 【下線部は柳沢による】

ヒルトは, 「ソシュールの法則」を誰が最初に見つけたかは分からないが, ヒルト自身はレ

²² F. Kurschat (1806-1884) は, 19 世紀で最も優れたリトアニア語文法 (*Grammatik der littauischen Sprache*. Halle, 1876) を書いた。彼のリトアニア語アクセントの記述, 分類は現代でも優れたものである。当然, 青年文法学派の研究者たちもソシュールもこれを使っている。この *rankà* 「腕, 手」のアクセントパラダイムは, クルシャトの分類記号では Ib であるが, 現代のリトアニア語研究では AP2 型と呼んでいる。内容は同じ。ソシュールの法則が働く型である (Nom. Sg. はその法則が働いた形, アクセントが語尾に移動している: *r'añká > *rañk'á > rankà)。「通して語頭アクセントをもつパラダイムをここにもっている」とは, この語は本来(つまり「ソシュールの法則」が働く前)語根にアクセントを全て持っていたということ。詳しくは, 柳沢「リトアニア語のアクセント研究」pp. 149ff. 参照(神山・町田・柳沢 2017)。

スキンから知るようになったと書いている。我々が想像したようにシュトライトベルクと同様にヒルトもレスキーン講義で知るようになったのである。ヒルトはリトアニア語のアクセント移動をソシュールとは別様に考えている。上で述べたようにソシュールの「ソシュールの法則」の説明 (*Recueil*, 526, note 2 参照) を「単純で呆れる」と言っている。彼のその法則は上で述べているように 1895 年の彼の『印欧語アクセント』と同じ説明である。いずれにせよ、「ソシュールの法則」はレスキーン門下のドイツ語圏の研究者達にはかなり以前から知られた法則であった。

7. 「ソシュールの法則」のプライオリティーは誰にあるのか？

今までの「ソシュールの法則」のプライオリティーの問題を時系列に纏めると以下のようになる。【 】内は私のコメントである：

・レスキーンは 1880 年代にこの法則を自分の講義で学生達に教えていた（シュトライトベルクの口頭での情報：Meyer 1923: 205, n. 1; Hirt 1929: 145）。【これは間違いなからう。誰がいつこの法則を発見したかは不明である。】

・ソシュールは 1889 年 6 月 8 日のパリ言語学会の会議で、後の Saussure (1894a) の論文の内容を発表したと言われている。【ここでこの法則が発表されたかは不明。Saussure (1894a) の論文でも法則を定義せずに、最後に「法則 *Accentuatin*」と触れてあるだけである。ソシュールはこの法則を理解していることは分かるけれど。】

・Streitberg (1894) (論文完成は 1892 年) は、この法則を使った例 (*m'ěsá > mèsà) を書いている。そして「女性名詞の場合、語根音節が circumflex 音調であるとき語尾にはアクセントが置かれねばならない。」(*ibid.* 156) との法則に触れている。【ソシュールがこの *IF* に掲載されたバルト語に関する論文、しかもドイツ人のなかで唯一親交があるシュトライトベルクの論文を読まなかったとは考えられない。これについてソシュールは何も反応を見せない。これは私には不自然に思われる。】

・ソシュールは、1894 年 9 月 8 日の第 10 回国際オリエンタリスト会議にてリトアニア語のアクセント法について発表。ここで初めてソシュールはこの法則を定義している。この法則を使うことによって、リトアニア語のアクセントパラダイムを単純にすることができることを主張。この会議でのレジユメは 1897 年に発表される。【リトアニア語のアクセント体系を考慮に入れている。後の Saussure (1896) に繋がる発表である。】

・Saussure (1894a) 「リトアニア語のアクセント法について」を *MSL*, III に発表。この論文は法則そのものについて論じたものではないが、この法則のことが一箇所触れられている。【ソシュールの書き方からすれば、この法則について後に書くとする。それについて自分のプライオリティーを主張しているようにも見える。】

・Hirt (1895) 『印欧語のアクセント』出版。この中でヒルトはこの法則を具体例とともに定義している。【ヒルトは Saussure (1894) を知らなかったと思える。あるいは知ったとしても、レスキーン門下の学生としてこの法則を以前から知っていた。ヒルトはこの法則について自己のプライオリティーについて触れない。それは当然なことだろう。】

・ Saussure (1896) 「リトアニア語のアクセント法」を *IF* IV, Anziger に発表．その最初のページに法則を定義．この論文の P. S. でソシュールはヒルトの『印欧語のアクセント』(1895)を批判．ソシュールはこの法則のプライオリティーは、ヒルトにあるのではなく、自分にあるとする（1894年のオリエンタリスト会議、また Saussure (1894a, 1894b)の2つの論文を挙げてプライオリティーの証拠とする）．【ソシュールは、「ソシュールの法則」を使うことによって、この法則が働く以前のリトアニア語のアクセント体系を内的に再建している．私が最も引かかる箇所はこのソシュールの P. S. の箇所である．彼の「ソシュールの法則」のプライオリティーへのこだわりである．】

・ Fortunatov (1897)は独自に法則を発見．以後、Meillet を初めとして、主要なスラヴ語学者らはこの法則がスラヴ語にも働いたと考えた．スラヴ圏ではこの法則は「フォルトゥナー トフ・ソシュールの法則」と呼ばれるようになった．【後年 Stang (1957)によって、スラヴ語に「ソシュールの法則」は働かないと主張され、今ではそれが主流の考えになっている．ソシュール自身は決してスラヴ語にこの法則が働いたとは言っていない．ソシュールの慧眼が見て取れる．】

・ 1913年2月ソシュール死去．

・ Hirt (1929)によれば、ヒルトは「ソシュールの法則」をレスキーンから知るようになったと書いている．【この発言はマイヤー、シュトライトベルクらの発言と一致する．】ヒルトは法則がソシュールによって発見されたのではないことを強調する．

ソシュールが主張するこの法則のプライオリティーについては次のような議論が可能であろう．ソシュールは、1894年にすでに自分が法則に触れている（この法則の定義を言っているのではない）のであるから、自分にプライオリティーがあると言う．しかしその論法でいえば、法則の真のプライオリティーは1892年にその法則を書いたシュトライトベルクにあるだろう．彼はそれを Streitberg (1894)に発表している．勿論、私はシュトライトベルクがその法則を発見したとは思わないが、それを初めて明確に論文の中に発表した人がプライオリティーを主張することができるとするならば、そうなると言っているのである．あるいはその法則を定義した人がプライオリティーを主張できるとすれば、当然、Hirt (1895)にプライオリティーはあるということになる．どこまでもソシュールには不利なのである．

大きな疑問は、レスキーンは何故この法則について論文として発表しなかったかということである（自分が発見したのではなかったからか？）．また疑問なのは、ソシュールはレスキーンがこの法則を学生達に教えていたことを知らなかったのかということである．もしそれを知っていてソシュールがプライオリティーを主張しているとするれば、私は彼のその態度がどこから来るのか分からない．また、レスキーンやレスキーン門下の人達にこの法則が知られていたことをソシュールが知らなかったとするれば、ドイツ語圏の研究に無知であったということになる．しかしそれは到底考えられない．彼は、ドイツ語圏の研究誌である *IF* にリトアニア語の論文を2編、その他を1編載せている．ドイツ語は勿論堪能

である。Streitberg (1894)がそこで触れているこの法則に彼は何故触れないのか(「*mĕsa は mĕsà になる」を参照。これは「ソシュールの法則」そのものではないか)。これも不思議といえは不思議である。ソシュールが最もリトアニア語アクセントに関心を持っていたのは、1894-96年頃であると言われる。ソシュールほどの人であれば、この時期に発表されたシュトライトベルクの論文は簡単に理解できたはずであるし、そこに用いられているこの法則のことも理解できるはずである。Hirt (1929)のソシュール批判は厳しい。ヒルトの立場にたてば、ソシュールのヒルト批判は理不尽に思えるだろう。

8. 結び

Sussure (1896)の P. S.さえなければ、つまりソシュールがその法則のプライオリティーを自分にあると主張しなかったならば、私の疑問は生じなかったのである。後の研究者達が彼のリトアニア語アクセントの研究の深さを尊敬の念をもって《ソシュールの法則》と呼ぶことに異論があるはずはない。しかしソシュール自身のプライオリティーの主張は、口の中に入り込んだ一粒の砂粒のように私を不安にさせるのである。ソシュールは本当にレスキーンあるいはレスキーン門下の人達がこの法則を知っていたことを知らなかったのか。

ソシュールほど取り上げられ、研究されている言語学者はいないだろう。専門の研究誌をもち、ソシュールの入門書や研究書は枚挙に遑がない(しかしその大部分は、ソシュールが長年をかけて研究した印欧語の史的・比較的な音論やアクセントの研究を扱ったものではない。常に『講義』中心である)。彼の伝記も英語とフランス語で書かれた大部なものが出版されている。そのうちの一つの J. E. Joseph (2012) 『*Saussure*』は、ヒルトについて二箇所だけ触れている(1つはソシュールのヒルト批判が載っている箇所、もう1つはヒルトの母音体系の著作についての箇所)。当然、Hirt (1929), K. H. Meyer (1923), Streitberg (1894) の「ソシュールの法則」のプライオリティーについて書かれた箇所はどこにも見当たらない。この Joseph の本は、「ソシュールの法則」の裏事情を全く書いていないのであるから、「ソシュール神話」の一端を助長しているように思える。他方、ここに挙げたレスキーンやヒルトはどうであろうか。今は、一部の比較言語学やバルト・スラヴ語の専門家以外では読む人はいないのではないか。Hirt (1929)は今でも印欧語のアクセント論では引用される本である。しかしこの中に書いてあるソシュール批判、つまり「ソシュールの法則」のプライオリティーについての記述は寡聞にして私は知ることがなかった。私の不勉強のせいもあり、Sadnik (1959), Meyer (1923), Streitberg (1894)という人達の書いたものを読み、Hirt (1929)に辿り着いた。それほど特殊でもない本のなかでヒルトは私の疑問を解く鍵を書いていたのである。「しかしこの考えは彼【ソシュール】によって見つけ出されたのではない。」この法則は様々な研究者達によって発見された。この意味を私は初めて正確に理解したのである。Sadnik 女史が「ソシュールの法則」を sog. „Gesetz von de Saussure” 「所謂《ソシュールの法則》」(Sadnik 1959: 23)と呼んでいることはある意味で当然であろう。それはレスキーンなどの印欧語研究者らの努力を正当なものともみなしたいからであろう。

(2020年11月24日成稿)

謝辞

* 本研究は JSPS 科研費 18K00571 の助成を受けたものです。

参考文献

- Derksen, R. (2015) *Etymological Dictionary of the Baltic Inherited Lexicon*. Leiden/Boston: Brill.
- Fortunatov, Ph. [Фортунатов, Ф. Ф.] (1897) Критический разбор сочинения Г. К. Ульянова „Значения глагольных основ в литовско-славянском языке”, „Отчет о присуждении Ломоносовской премии в 1895 г.”, *Сборник Отд. русского языка и словесности АН*”, т. LXIV, № 11.
- Hirt, H. (1895) *Der indogermanische Akzent*. Strassburg: Trübner.
- (1929) *Indogermanische Grammatik*. Teil V: *Der Akzent*. Heidelberg: Carl Winter.
- Joseph, J. E. (2009) Why Lithuanian Accentuation Mattered to Saussure. *Language and History*, 52 No. 2. 182-198.
- (2012) *Saussure*. Oxford University Press.
- Kurschat, F. (1876) *Grammatik der litauischen Sprache*. Halle.
- Leskien, A. (1881) Die Quantitätsverhältnisse im Auslaut des Litauischen. *AslPh*, Bd. V. 188-190.
- (1919) *Litauisches Lesebuch mit Grammatik und Wörterbuch*. Heidelberg: Carl Winter.
- Meyer, Karl H. (1923) *Historische Grammatik der russischen Sprache*. Bonn: Verlag von Riedrich Cohen.
- Mikkola, J. J. (1897) Baltische etymologien. *Beiträge zur Kunde der indogermanischen Sprache*. 22, 239-255.
- Saussure, F. de (1879) *Mémoire sur le système primitif des voyelles dans les langues indo-européennes*. Leipzig: Teubner.
- (1894a) À propos de l’accentuation lituanienne. *MSL*, VIII. pp. 425-446. [*Recueil*, 490-512.]
- (1894b) Sur le nominatif pluriel et le génitif singulier de la déclinaison consonantique en lituanien. *IF* IV, pp. 456-470. [*Recueil*, pp. 513-525.]
- (1896) Accentuation lituanienne, *Indogermanische Forschungen*. VI, Anzeiger, Strassburg. 157-166. [*Recueil*, pp. 526-538.]
- (1922) *Recueil des publications scientifiques de Ferdinand de Saussure*. Genève: Sonor.
- Sadnik, L. (1959) *Slavische Akzentuation*. I. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Schmidt, J. (1883) Das suffix des participium perfecti activi. das primäre comparativsuffix. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung*. 26, 329-400.
- Stang, Chr. S. (1957) *Slavonic accentuation*. Oslo.
- Streitberg, W (1894) Vokaldehnung vor tautosyllabischem -ns im Baltischen. *IF*. III, 148-156.
- Verner, K. (1877) Eine ausnahme der ersten lautverschiebung. *Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen*. 23, 97-138.
- Zinkevičius, Z. (1981) *Lietuvių kalbos istorinė gramatika*. II. Vilnius: Mokslas.
- 神山孝夫 (2017) 「ソシユールの生涯と業績」 pp. 7-81. (神山孝夫・町田健・柳沢民雄 『ソシユールと歴史言語学』 歴史言語学 モノグラフシリーズ 1 日本歴史言語学会・大学教育出版)

柳沢民雄 (2017) 「リトアニア語のアクセント研究」 pp. 141-196. (神山孝夫・町田健・柳沢民雄 『ソシユー
ルと歴史言語学』 歴史言語学 モノグラフシリーズ 1 日本歴史言語学会・大学教育出版)

執筆者紹介

氏名：柳沢民雄

所属：名古屋大学名誉教授